

おわりに

2013 年度一橋祭研究「観光と地域鉄道の活性化」をお読みいただき、ありがとうございました。今回の研究は 2012 年度の一橋祭研究である「地域公共交通を考える」の根本にあった問題意識をより「地方」という視座に近づけ、さらに別の角度から考察を深めたものとなりました。そういった意味では別個の研究ではありながらも様々な面で関係を持っていると言えるのではないでしょうか。ご興味を持たれた方は当会のホームページで公開しておりますのでご参照いただければと思います。

さて今年のテーマであった「観光」、この言葉の語源は中国の故事にある「国の光を観る」という言葉にあるそうです(岡本編,2001)。ここでいう「国の光」とはすなわち国王の威光ですが、現代の「国の光」とは何でしょうか。何か特定の事物 1 つを指して「これが現代の『国の光』である」というのはなかなか難しいと思います。そうした意味では日本中に「国の光」は散らばっていて、それを見つけるために人は旅行するのではないかと私は考えています。今回の研究を通じて鉄道もそうした「国の光」の要素になる可能性を秘めている、と感じられた方も多いのではないのでしょうか。そうした鉄道の魅力を私たちのような鉄道ファンだけでなく、より広い一般の方に認識してもらうためにはどうすれば良いのか。その模索は全国で行われているように思います。

少し前は「鉄道ブーム」などと言われ、様々なメディアで鉄道が紹介されてきました。最近は少し落ち着いたかのように見えますが、書店に並ぶ雑誌や旅番組では鉄道が多く紹介されています。やはり現在でも多くの人々が鉄道に注目していると言えるのかもしれません。しかしブームはやがて終わりを告げます。その後も鉄道を利用した観光が人々の注目を集められるかどうかは今後の取り組みに大きく左右されるでしょう。鉄道を利用する観光の命脈を保つための取り組みとして何ができるか、部員があれこれと考えた結果をまとめたものがこの研究誌です。ここまでお読みいた

いただいた皆さんそれぞれに思うところがあるでしょう。この研究誌を読み終りましたら、ぜひ鉄道と観光の関係性について思いを巡らせていただきたいと思っています。

そしてひとしきり考えたらこの研究誌を閉じてどこかへ鉄道を使って旅に出ることをおすすめします。泊りがけといった大掛かりなものでも日帰り圏内にも魅力的な鉄道は数多くあります。例えば一橋大学のある東京都の方なら事例研究で挙げたいすみ鉄道や銚子電鉄なら十分日帰りで行けると思います。研究誌を読んで考えた後、それに思いを馳せながら実際に行ってみる。自分の目で見て、体験することで今まで見えてこなかったいろいろなものが見えてくるかと思います。そこに自分にしか見えない「国の光」を見つけることもできるかもしれません。

2020年に東京でオリンピックが開催されることが決定しました。2020年にはこの国はどうなっているのでしょうか。いろいろな声が聞こえてきています。その2020年まで、そしてその先も全国津々浦々を走る鉄道と沿線地域が共存することができていること、そしてその頃には東日本大震災の被災地が再び「国の光」としての輝きを取り戻していることも願わずにはいられません。それを支えるための1つの鍵となるのが「国の光を観る」、観光なのかもしれません。

最後になりましたが改めましてお読みいただいた皆様、一橋祭展示に足を運んでいただきました皆様、そしてこの研究誌を執筆した部員と苦心しながらもまとめあげた研究担当に最大の謝意を表して本文を締めさせていただきます。

一橋大学鉄道研究会 第51代部長

クハ 103188